

社団法人 近畿建設協会 支援シンポジウム

“ 水源地の村 ” からの提言

# 「朱雀（南）に学ぶ 自然との共生」

## 報告書

平成22年8月25日開催

基調講演 菅谷文則先生(奈良県立橿原考古学研究所所長)

「記紀の建国伝承と吉野・川上」

事例報告と紹介

「源流には、宝がいっぱい！」

川上村での環境学習の体験から(体験校報告)

神戸夙川学院大学 河本 大地 先生

座談会(リレートーク)「語り部が伝える山村の魅力」



財団法人 吉野川紀の川源流物語

社団法人 近畿建設協会 支援シンポジウム

## “水源地の村”からの提言「朱雀(南)に学ぶ 自然との共生」

2010年8月25日(水) 橿原市商工経済会館 7階大ホール

主催 森と水の源流館 (財団法人 吉野川紀の川源流物語)  
後援 国土交通省近畿地方整備局 紀の川ダム統合管理事務所  
奈良県教育委員会  
環境省 きんき環境館(近畿環境パートナーシップオフィス)  
吉野川紀の川流域協議会  
(和歌山市・岩出市・紀の川市・かつらぎ町・高野町・九度山町・橋本市  
五條市・下市町・大淀町・吉野町・川上村)  
奈良県川上村  
川上村教育委員会  
社団法人 平城遷都 1300年記念事業協会  
協力 NPO法人 奈良21世紀フォーラム  
奈良県「山と森林の月間」協賛イベント



### プログラムと目次

13:30	ごあいさつ	3
13:40	基調講演	4
	菅谷 文則 先生(奈良県立橿原考古学研究所所長)	
	「記紀の建国伝承と吉野・川上」	
15:10	休憩	
15:20	体験と提言	
	「源流には、宝がいっぱい！」	
	川上村での森林環境学習の体験から(体験校報告)	
	神戸夙川学院大学 河本 大地 先生	20
	座談会(リレートーク)「語り部が伝える山村の魅力」	
16:30	おわりに	37

なおこの報告書は、後日音声記録から聴きお越したもののため、講師ならびに発表者に文責はありません。



## ごあいさつ

---

川上村長

財団法人 吉野川紀の川源流物語 理事長 大谷 一二



本日はお忙しい中、大勢お越しいただきまして、本当にありがとうございます。また平素は川上村と財団の運営につきまして、皆様方のご協力をいただき、心からお礼申し上げます。

昔のことを言って大変申し訳ないのですが、昭和4～50年代当時、奥田良三奈良県知事が「ぜひとも川上村から水が欲しいのだ。大迫ダム、大滝ダ

ムを作っていただけののなら、奈良県は県民人口100万人になる。」と言われました。当時は奈良県民67万人といった時代でございます。現在は奥田さんの想像をはるかに超えて140万人という県民人口でございます。

「ダムができて栄えた村はない」と言われる中、川上村では、きれいで豊かな水をいつまでも流し続けようではないか、それによって、過疎ではあるけれども、「ダムができて栄えた村になろうではないか」ということで、現在まで村政を進めてまいりましたが、ここでさらに皆様方のご指導をいただいて、川上村がまだまだ元気に存続していくために、学ばせていただきたいと思いますと考えているわけでございます。

今年は平城遷都1300年祭ということで、奈良県は盛り上がりしております。歴史の分野では、南部地域の存在はとても大きいものだと思っております。川上村でも毎年2月5日の朝拝式なども永きにわたり続けてきております。本日のこの催しは、私ども南の地域からの発信ということで、菅谷先生や河本先生らのお話を聞かせていただき、今後の村づくりのヒントを教えてくださいたいと考えるわけでございます。

現在は過疎で悩む川上村ですが、最高時には小学校、中学校集めて19校、1900名の在学を抱えていたわけなのですが、今は小、中学合わせても五十何名という寂しさで、1人でも多くの人に来ていただくということが、今の私に課せられた任務なのでございます。どうかこの点にも、皆様方のご協力をお願いするものでございます。

それでは皆様方のますますのご健勝と、今日は実りのある会にいたしたいと思っております。どうか、長時間ではございますが、最後までよろしくご指導賜りますようお願い申し上げます。私のあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

## 基調講演

---

### 「記紀の建国伝承と吉野・川上」

講師 菅谷 文則 氏 プロフィール

(すがや ふみのり)

1942年(昭和17年)奈良県生まれ

1968年奈良県教委文化財保存課技師に採用され、県立橿原考古学研究所研究職技師に。飛鳥浄御原宮跡や法隆寺など多くの発掘調査に携わる。

1979～1981年 北京大学考古系留学。

1995年滋賀県立大学教授に就任。2008年3月に退職、同大学名誉教授。

2009年4月橿原考古学研究所第五代目所長に就任。

真言宗醍醐派竜泉寺の正大先達号を持つ山伏。

#### 【司会】

このシンポジウムは、毎夏8月最後の週に、森と水の源流館の休館日である水曜日にスタッフ全員で橿原市内へ参りまして、たくさんの方々のご協力をいただいて実施する夏の恒例事業で、橿原へ出てきて本年度で4回目を迎えます。

「水源地の村からの提言」と題しまして、山や森の持つ多様な価値を皆さんと一緒に考えていこうという趣旨で行っており、これまで歌人の故前登志夫先生に始まり、森林ジャーナリストの田中淳夫先生、昨年は東京農業大学の上原先生をお招きし、森林療法をテーマに取り上げました。毎年本当に多岐に渡る話題提供や問題提起をいただいております。

今年は平城遷都1300年祭が開かれておりまして、春からずっと奈良が元気ににぎわっております。誠にうれしいことですが、同じ奈良県でも川上村を含めて、南部地域は少しこのにぎわいに乗り遅れているのではないかと考えているのは、私だけでしょうか。

以前から平城遷都1300年祭の年には、南部地域からぜひ何か発信をしたいと思ってまいりました。天の四方をつかさどる神、青竜、白虎、玄武、朱雀の中で、南は朱雀に当たります。とても象徴的で意味深くかつ、ロマンを感じる、この朱雀という言葉に思いを込めた南部らしい発信ができればと考えておりましたところ、このテーマに最もふさわしい先生に講師をお引き受けいただくことができました。

本日の基調講演講師、菅谷文則先生をご紹介いたします。先生は正式な山伏の先達でもいらっしゃいます。本日はそのあたりからも興味深いお話がいただけるものと思います。では、よろしく願いいたします。

【菅谷文則先生】



## 日本の変革のとき、いつも登場する「吉野」

私は県庁に入ってから、よく聞いておりましたのが、「吉野は日本が変革するとき、動乱するときは必ずちょこっと目立ったりするのだ」と、吉野の人がよく言っておられました。最初は、日本建国の時に、神武天皇が吉野で力をつけた。これは信じるも信じないも後でお話をします。次に壬申乱（672）というものがありましたが、やはり吉野から始まった。三つ目は、鎌倉時代になるときに、静御前や義経が、吉野の今は宇陀市大宇陀区の竜門の郷に逃げたということです。それから後醍醐天皇が南北朝の首都を吉野に置いたことです。これは川上村に史跡がたくさん残っております。また、民俗行事である朝拝式は今も行っているらしいです。

川上村の朝拝式は非常に有名でありまして、なぜ有名になったのかと申しますと、戦後になって川上村の人たちが鎧の袖が「えらいものではないか」ということで、鎧の専門家に見てもらおうと、鎧・甲冑の超一人者だった橿原考古学研究所の初代所長の末永雅雄先生に見てもらったら、これはすごいということになって、すぐさま重要文化財に指定されたものがあります。

それから幕末には天誅組が出てきます。そして最後に、飲み屋や証券会社でよく流行った「吉野ダラー」という単語。これは戦後、朝鮮戦争が終わって復興ブームからバブルの時まで、吉野のスギやヒノキが高値で売れましたので、山地主さんのところにいっぱい入りまして、大阪の証券市場まで動かすということになりました。それを吉野ダラーと言っておりました。

## 神武天皇 大和侵入経路

次に今日のタイトルの「記紀」の伝説ということをお話させていただきます。日本国家といういろいろなことを想像すると思いますが、その第一の関心は、天皇制ができたということです。神武天皇という天皇がいらっしゃいました。この人はもともと彦火火出見（ひこほほでみ）という方なのです。ご本人は神武天皇という名前を知りません。お亡くなりになって1200年以上たってから神武天皇という漢風の名をもらわれたのです。

神武天皇は一般に宮崎県の日向の人だといいますが、これも学者の中には、「宮崎県ではない。あの伝説は福岡県か大分県の伝説だ」という人がいます。「日向」を「ヒユウガ」と読むか「ヒムカイ」と読むかの違いでして、「ヒムカイ」から来たというと、今の大分、福岡くらいになります。「ヒユウガ」と読んだら今の宮崎になる。「ヒユウガ」という地名、国の名前、地域名ができるのは後のことですから今も分かりません。

その神武天皇には、彦五瀬命（ひこいつせのみこと）というお兄さんがいらっしゃいました。このお二人はなぜか九州から瀬戸内海を東へ行き、大阪から山を越えたところに大和という立派な土地があるところがあるらしいから、そこへ行こうということで、船出をされました。現在の東大阪市のあたりまで船で来られ、そこから大和に攻め上がろうとしました。その辺まで行ったら草江坂、いまは「日下」という地名がありますが、草江坂というところへ行くと大和側から弓を引く人がおりまして、戦争になり、お兄さんが弓に当たってけがをされ、退却しました。神武天皇とお兄さんは船に乗られて、伝説ですと難波から南へ南へ行こうというのです。

南へ行ったら今の紀ノ川の下流、和歌山県です。和歌山市のところまで到着した。するとお兄さん、つまり彦五瀬命の調子がさらに悪くなりまして上陸されました。今の和歌山市のちょっと南に竈山（かまやま）というところに上陸されて、そこでお兄さんは亡くなります。現在そこにはお墓があります。そこからまた不思議で、陸地にいればいいものを、また船に乗るのです。船に乗ってまたなぜか南へ行くのです。紀伊水道を越えて太平洋へ出ていくのです。南へ南へ行きます、紀伊半島の一番先端、今の潮岬のあたりを越えていくのです。現在の新宮市、これも説がいっぱいあって分かりませんが、一応、新宮市としておきます。新宮の辺まで来ますと、なぜか陸上に入っていくのです。ここからあと川上村まで来るのですが、ここも十津川と取り合いしてしまっていて大変なのです。上陸した神武天皇はそこで迷うわけです。どこへ行きたいか迷い、どうしたらいいか分からなくなってしまうということになっています。『日本書紀』と『古事記』ではちょっと違いますが、夢で天照大神が現れまして、「お前はここから紀伊半島を北上するにあたって、山案内人がいなければ行けない」（意訳）とおっしゃられました。今風に言ったらガイド（郷導者）がなければ行けないと。ガイドとして3本足のカラス、つまり八咫鳥を遣わそうということになりました。夢から覚めた翌日には大空から八咫鳥が来ていまして、それに従って行ったら、今の東吉野村までは確実に行けたということです。

この八咫鳥はご存じのとおり、中国の古い伝説を書いた本にあるのですが、太陽のシンボルであります。その段階から神武天皇、日本の天皇家は太陽のシンボルで、天照大御神自身が天から照らしてくれているわけですから太陽。そういうふうに戦前は解釈していました。今はよく分かりません。その太陽を背にしたらいいというのです。背中に太陽を負って歩くわけですから、考えてみると太陽を負って歩いたら午前中は西を向いて歩かなければいけないし、午後になったら東を向いて歩く。いつも同じように行き来するのですが、なぜかそういう伝説で太陽を背にするということになっているのですが、北を向いて歩くのです。太陽は南中するので、南のほうから照らされますから真北になります。

## 川上筋？ 十津川筋？

次の伝説が出てきますのは今の東吉野村でありまして、十津川筋へ行きますと神武天皇の伝説と書いています。北山筋へ行くとやはり書いてある。川上村の白屋岳をどうも越えたようで、井光のことが『日本書紀』に載っていますのでその辺を越えたい。ともかく北山川筋、つまり、下北山、上北山、川上のルートを通るか、十津川、大塔というように、それから五條市、それから吉野川。ちょっとややこしいのです。十津川を越えて北へ行って、また吉野川に出てくる。吉野川の記事が『日本書紀』にはないのです。

私はそのことをだいぶ昔から考えておりました。最初に考えつきましたのは、『日本書紀』にある、神武天皇が熊野からこちらに来た伝説は何か「科学的根拠」はないのか、「歴史的根拠」はないのかと考えました。熊野に上陸して吉野まで来るというのは、現代風にみたら、まさに役行者の修行のコースです。修験道は今日の天台宗の思想でいきますと、熊野の本宮大社を1番にしまして75番を数えて、吉野川の柳の渡し、今の上市のあたりまでを靡と呼んでいます。真言宗は75番から南へ行く。だから、吉野山に登って大峰山へ行って弥山に行く。この75靡ルートはちょうど神武天皇のルートなのであります。

そして神武天皇の伝説は尾根筋を越えてつくられた伝説か、川筋を越えた伝説かということが問題になってくるわけでありまして。源流は絶対に尾根なのです。我々はもの考えるときに、資料を集める前に見込みを立てます。それで一時期大きな川を下流から上流に歩いていくという旅行法、交通法と、尾根をたどるとどちらが有力かなということ考えたわけです。

私は昭和33年、初めて川上村の大台ヶ原、大台ヶ原は川上村ではないのですが、行く途中は川上村ばかりでして、その行ったときに、今ほど川縁に家がなかった。みんな村は高いところにありました。道路際には役場があった。そういうところには土場とか言う、みんな家は上にあるけれども、仕事のために国道際に家を作りそこを事務所にするというような生活スタイルだった。これは川上村だけかと思いましたが、昭和43年に初めて十津川筋に入っても全く一緒でした。それから東南アジアを専門に研究しておられる人とか、い



ろいろな地理の先生とかに聞いたりしましたら、「大きな川は、平野部は川沿いに歩くけれども、ちょっと山の中の川になってきた途端に、多くの人は山の上に住むのだ。山の中腹、もしくは山の上に住んで、道路は山の稜線上を通るのが圧倒的に多い」と。「なぜですか」と聞くと、川筋に道路をつけるとすぐに水害で飛んでしまう。道路といっても歩く道路ですから、幅2~3尺もあれば十分です。ですから、タイのメコンにせよ、中国の揚子江の最上流にしる、村は全部高いところにある。高いところから降りてきて、川は横切るだけなのです。川に沿って走らない、歩かないという法則が世界的にあるようなのです。ですから、神武天皇も山沿いを歩いたのでないかと思うのです。

そうすると今の山伏の人たちが歩く熊野からずっと山越えに来ているとするといいい。修験道が一番流行っていた時、今から100年前、60~70年前は、ほとんどの人が吉野から歩いていたのです。吉野山から大峰山までだいたい26kmほどなのですが、標準的な8、9時間をかけて歩いていたのです。往復で2日は必ずかかった。今は自動車で天川村洞川(どろがわ)まで行きまして登り2時間半から3時間で登って、下り2時間ほどで下りてくる。日帰りするようになりました。

こういうときも、山の上に交通路があったとしたら谷間はどうなるのかというと、先ほど横切ると言いました。谷を横切るために川筋に出てくるのです。現在は川上筋も十津川筋も北山筋も皆一番谷底に国道や県道がつけられている。これは現在も土砂崩れがものすごく多いのです。数年前には上北山村で半年近く道路がなくなって大変な思いをされました。この時は、県庁の人たちが上北山村や下北山村へ行くには、新宮経由で行っていたわけです。つまり、山の上の道のほうが安全なのです。

すると私は、神武天皇の歩かれたのは間違いなしに、これは自信を持って谷筋ではなかったと言えます。本宮大社のあたりから山に入って、どちらにも争われる、上北山村、下北山村の北山筋、十津川の間。これはちょうど村境なのですが、山の頂上にある。川上村のほうへ来まして、現在の大峰山を過ぎて川上村高原くらいから下りてきて、白屋のほうへ渡ったのではないかなと思うのです。

## 産業と信仰とともに

そうするとそこに、ちょうど渡り地点に大きな縄文遺跡が見つかりました。宮の平遺跡です。『源流の縄文遺跡』という冊子があります。これは丹生川上神社の上社が大滝ダムで水没するというので、事前発掘調査をした記録のダイジェスト版で、A4版で10cmほどの厚さです。源流館に行かれましたら図書コーナーにありますので、ぜひ源流館に行かれてご確認ください。遺物も源流館に展示しております。この裏表紙を見ていただきますと、石棒というものが建っております。石棒は50cmほどの石が立てられています。遺跡から石棒を返して山を見ますと、白屋岳の方向です。山肌に6段に分かれて白石が露出していま

す。この山のふもとにこの間私も源流館の人たちをお願いして下見ということで7月の初めに行ってきました。

この山は実はここに宮さんがありまして、その宮さんはいま檀原へ移転しまして、お寺は桜井市へ移転しました。村には絵図がありまして江戸時代にできた絵図です。それを見るとこの山を信仰しているのです。ここに白い石灰岩がいっぱい見えました。この石がちょうど方向が合う。この向こうがちょうど白屋岳でして、鷲字口へ抜けていく、今もハイキング道路としてあります。

写真で岩がガチャガチャと見えているあたりは、吉野の国栖紙とか宇陀紙とか吉野紙とかいっている紙をすく人たちがそこへ行って、石灰岩を採りまして、それを紙にすき込むのです。

吉野町の国栖という、なかでも窪垣内で作っている紙は、今いろいろな種類を作っていますが、もともとは3種類作っておりました。非常に薄い漆こしという紙。これは腰が強い紙です。漆の木からとってきた漆液の不純成分をこすためのこし器の紙なのです。これは化学繊維が、不織布ができましたので需要がゼロになりました。

もう一つは非常に高級な御簾（みす）紙。これはちょっと言いにくいのですが、昔、政府が売春宿とか遊郭をみていたときに、遊郭で主に使われた紙であります。太夫さんや地位の高い女の人たちがよくお使いになった御簾紙。立派なちり紙であります。

それから宇陀紙。これは今も生産量が1番多い紙で需要が多いです。これは表具をするときに、裏打ちにする紙であります。その紙は今日も需要があります。吉野で作る紙は、今は秘密でもないのですが、石灰岩の粉というか液体というものをすき込んでいまして、非常に強く防腐効果も高い。今も日本で最高級の表具をするときは宇陀紙を使っておりますし、国宝や重要文化財の修理も全部その紙を使っております。

そして、ここには産業、信仰がくっついておりまして、戦前には神武天皇の関係もあります。丹生川上神社は3カ所あるのです。川上村にあったのは上社であります。いまは高いところに移られました。もう一つは東吉野村小にある。もう一つは下市町の長谷、広橋峠を越えたところにある、この3カ所です。

戦前の政府は3カ所とも指定されました。上(1906年)、中(1922年)、下(1871年)というふうに指定されました。確かに上社と言っているし、それから見ても川上村が一番遺跡的にも古いと思います。神武天皇の伝説は、まさに丹生川上神社上社所在地を舞台にして出来上がったと考えられます。

神武天皇は現在の東吉野村へ行かれましてからは、兄猾（えうかし）と弟猾（おとうかし）という兄弟のうち、弟と親しくなるのですが、そのうちに現在の吉野町のあたりへ行くと岩の中から人が出てきた。しっぽが生えていた。これは国栖族（くずぞく）といったらしい。井光でもしっぽの人が出てきて、国神といい、のちの吉野首部（よしののおびとべ）の先祖といわれています。東吉野から今の宇陀市、旧大宇陀町、旧菟田野町まで来たら、戦争をいっぱいするのです。ちょっとだけ桜井市へ出かけていく。だから神武天皇が

戦争をされたのは、現在の東吉野村と、現在の宇陀市以外、どこでも戦争をしていないのです。それでなぜか日本国家を統治されたようでありまして、最後は橿原へ来て、即位したとしています。

来る途中と、来てからと、『日本書紀』と『古事記』では違うのですが、三輪神社のふもとにべっぴんさんがいたので、あれを嫁さんにしようと思って嫁さんにした。それでめでたし、めでたし、で日本国をつくったというのが日本建国神話なのです。その日本建国神話の一番大事な土地は吉野と宇陀なのです。

そういう伝説がいつできて、何を舞台にして、神武天皇という人が存在しなかったということは、ほぼどの本にも書いてありますし、今は思想としては『日本書紀』に書いてあるから存在する。それを換算して、紀元前 660 年の 2 月 11 日に即位されたということに明治の学者が計算をしまして、そうなった。

そういう話は何かモデルがないと、九州から急に奈良にやってきて、奈良盆地に行こうと思ったけれども山があって、草江坂で彦五瀬命がけがをして死んでしまったから、紀伊半島を回ってなんて言うのはどうしても考えられないです。大阪湾から南へ行って紀伊水道を越えて太平洋へ出てしまっている、太平洋を走っているわけですから波も荒いし、これはどう見てももう少し地理的な観察力が、地理がちゃんと頭に入ってからできたお話だと思うのです。



## 熊野と大峰山とつなぐ山稜の道

この神話が、熊野と吉野を結んでいるという、実際の交通路があったということだと思  
うのです。この川上村の宮の平遺跡から出土した縄文時代早期の土器と同じような土器が  
熊野灘周辺でも、和歌山の田辺市あたりでも出ておりまして、決して大和盆地、吉野と熊  
野と三重県の牟婁（むろ）と関係なかったわけではないわけです。だからたぶんこれは山  
の道だと思います。

すると、修験の山の道がいつからできたのかということ調べなければいけないという  
ことになりまして、これは私ども本職であります。調べようということになって、奈良県  
山岳遺跡研究会というものを組織しました。最初は、私が会長をしていたのですが、  
今はもう3代目の会長になっています。というのは、年齢を取ってくると山の中を歩き回  
れないようになってきまして、OBにリタイアしているのです。

それでいま言った吉野山から大峰山へ行って、熊野に出るまでの山の上に遺跡があるか  
どうか探そうということで探し歩き、今も探し歩いているのです。結局、分かったことは、  
大峰山の山頂までは明らかに奈良時代の真ん中くらい、今から1260年か1270年前までは  
人が確実に行ってた。さらに南にある「弥山」という山でも奈良時代の真ん中くらいに  
人が行ってたということが分かりました。たった2カ所、分かっております。

今、私たちが狙っているのは十津川村の玉置山の頂上でそんなものがないかと思って、  
探しまくっているのです。あそこはいろいろな電波塔とか建ってしまっていて、工事でほじく  
り返しているのです。最近、去年ですがようやく分かったのは、平安時代の初めの土器は  
拾えたので、もう1、2回行ったら拾えるだろうと思っていま頑張っているのです。

今後、調査をもう少し進めていったらそういうことが分かるのですけれども、今のとこ  
ろ想像にしかすぎないのですが、縄文時代以来どうも熊野と大峰山系の山の稜線上を歩く  
道。これはのちには狩人の道にもなるでしょうし、そういうものがあつたのではないだろ  
うかと考えています。

それを利用したのが修験道ではないか、また記紀の神話群もすでに忘れかけていた道を  
神武天皇の道として復興していったのではないかと思います。山の道というのは、人が歩  
かなければ、すぐに消えてしまいます。川上村柏木から大峰山へ数度登ったことがありま  
す。若いときには山岳救助隊に入っていましたので、奈良県の県警で救助を外部委託した  
ときに、遭難救助で何度か入っていました、いま川上村の役場や源流館で聞きますと、「川  
上の柏木から大峰山へはちょっと歩くのは無理だろう。木が生い茂って道が飛んでしまっ  
ている。」「それを何とか復興したらどうですか」と、この間も無責任なことを申し上げ  
たのです。

そういうような、吉野の人の記憶に残るところがモデルになって神武天皇の道が出てき  
た。そういうのがあつたという記憶がありまして、南から北へ歩いていくと十津川に出る。  
川上村の南は上北山。上北山の南は下北山。その南はもう和歌山に入るのですけれども、

わかりにくいです。十津川筋も五條を過ぎてからどうなったのかはなかなか分からない。十津川と上北山がくっつくのですけれども、そういうのはなかなか分かりません。そういう知識ができたなら、修験道でもそれを利用しようと考えたと思います。

日本で完全な地図ができるのは江戸時代です。実際は室町時代には、かなりはっきりした地図が分かっていたようであります。もっと前にも部分的には分かっていました。近所に住んでいるのだから、あそこに山がある、あそこに岬がある、あそこに岩場がある、砂場がある、と誰でも知っているわけですが、日本列島や紀伊半島となると分からないわけです。

## 尾根筋と神武天皇伝説

いま私たちは、一般的に吉野山から本宮まで歩くのには6泊から7泊していきます。でもこれは、私たち普通の山伏はそうしていますが、もうお亡くなりになりましたが、蔵王堂の修験の方でお坊さんの人ですが、この人は何と、吉野山から熊野まで3日で歩いたそうであります。歩くというようなものではない、多分、ほとんど寝ていないと思うのです。片道2日半で、5日から6日で往復している。

吉野山を出発したら、われわれは大峰山の頂上で1泊します。でも彼らは、1日で弥山を越えてさらに釈迦の頂上くらいまで行くそうです。夏ですから、夜に3時間から4時間寝ればもう朝明けてきますので、またワットと行ってしまおう。そのくらいに走る人たちも山の連絡者としては考えたらいいわけでありまして、飛鳥時代にも熊野と飛鳥の宮殿の間を山の道を超えて行っていたと考えるのがいいのです。

山の道というのですが、今はリュックサックを背負って、どこやらに山小屋がある、どこに泊めてもらうところがあるのを知っていて山に入ります。ところが古くはそういうことはありません。これについてはやはり、山の修行者、あるいは山の道を支える人がいたわけです。

これはどういう人かという、例えば、江戸時代の記録しかないのでよく分かりませんが、川上に高原という大字がある。高原の人たちは夏になりますと大峰山の頂上ではなしに、吉野と大峰山の途中に茶店を何箇所も出していらっしやいまして、それを下から荷物を持って行って、茶店でいろいろなものを売っていたわけです。

それからまた、京都の醍醐寺と聖護院の門跡さんは一生に1回、大峰山を熊野まで行くのですが、実は高原村や各地の村に、門跡らはお金を払っています。なぜかというところ、門跡さんは行くのに何十人から200人もの供を連れて歩いていまして、その人たちにお金がいっぱいいるわけです。その間に門跡さんが頂上で茶店を開く許可を与えるわけですから、「ちょっとお前、金をよこせ」と税金代わりに取り立てていた。そういうことは高原の人もやっておりまして、もうちょっと下流側の人も頂上へ行ってやっていた。

川上村と背中合わせの上北山村に天ヶ瀬というところがあります。いま天ヶ瀬の人たちは皆さんもご存じのとおり国道筋に住んでいらっしゃいます。旧道があってちょっと新道の間に住むのですが、これは昭和50年近くまで皆、上のほうに住んでおられた。国道がきれいに舗装されて下に降りてこられました。天ヶ瀬というところでは、財団法人天ヶ瀬組というのをつくって、山の修験者の、今でいうとサポート隊というようなことをされていたわけです。

よく十津川は全村土族だとか、無税の地だとか、上北山、下北山筋は、税金はすべて太閤検地の時もせずに、材木を川で流して、新宮などで回収して大坂に出すということがありました。それはなぜかという、戦国時代に節目において領主制確立のプロセスとして、検地を全国的にしました。太閤検地が一番有名です。秀吉が全国を制覇すると同時に、端の端まで日本中の田んぼや畑を計測して、山はあまりしていないのですけれども、これは税金を取り立てるためにしたわけであります。

その時に、北山筋は代官として行った人は、通過はようやくしたのですけれども、計測するところまでいかなかった。どこを見ても田んぼは見当たらないのです。「お前のところは山なんだ」。同じことは十津川も一緒だったと思うのです。だから十津川は全部無年貢地になったわけです。というのは土族、武士階級の人たちの土地は無年貢だったわけですから、江戸時代は私たち庶民にとっては非常にいい時代で、農民の人以外税金を納めないでよかったです。商工業者は税金を納めないでよかったです。

江戸時代も後半になりますと、税金ではないけれども、いわく因縁をつけて、毎年幕府は寄付である。冥加金を取っていたのですけれども、初期は商人、生産業の人はただでした。税金は農民だけだった。農民の人はたいへんだったと思うのです。その時に、大変失礼ですが、上北山とか下北山とか十津川筋は、検地に入っても田んぼがないわけですから税金が上がっていかないわけです。主に水田と畑から取っていたわけですから、上がらない。こんなことなら無年貢地にしておいたらいいいということがどうも実態だというのが、いま歴史学者がおっしゃっておられます。これは30~40年前からの定説になっています。

そうして、十津川筋は全戸全員土族階級になっている。天誅組の時は五條代官所を襲って、独立王国を作るのに失敗しまして、天辻を越えて十津川を転々として行った。それからなぜか北山筋を通過して大和に戻ってくるのです。北山筋の谷筋を通り、東吉野村に入った人は捕まえているのです。大峰山の修験の道を通った人はうまく来ているのです。

最後まで来た人は、川上村の白屋から東吉野村に抜けたり、上市や下市で待ち伏せに遭いました。三重県の津の藤堂藩と、尾張藩とか、滋賀県の井伊藩とか、皆チャンチャンバラバラをやって捕まった。さらにそこで生き残った人は、うまく川上村から白屋を越えずに上市にそのまま出て、五社峠をたぶん越えた。それから竜門岳を越えて大和盆地に入っています。その人たちは後に落武者狩りで捕まっておりますけれども、ともかくそうしていくつかの道を皆、尾根筋を越えておられる。これは神武天皇伝説にもそのままいくと思うのであります。

## 東大寺の僧侶らの修行場？

ここでもう一つ新しいお話をさせていただきますと、大峰山の修験道を最初は誰が始めたのだろう。これは役行者という人で、私はいくつか文章を書いて発表をしているのですが、なかなか学会では同意をもらえません。菅谷説大賛成と誰も言ってくれないのですけれども、それは大峰山の山頂に、奈良時代に国家的宗教として仏教が修験道より先に入って行ったと思うのです。それは東大寺のお坊さんのグループだったと思います。

奈良時代の初めくらいには全国でお寺が 500 カ所くらいあった。それが奈良時代になりますと、500 カ所プラスあと 500 カ所くらい、奈良時代を通じて倍くらいになる。奈良時代のお坊さんたちは皆、国家試験があったのであります。今は、お坊さんには国家試験はございません。戦前もありません。江戸時代もありません。国家試験をきっちりやっていたのは奈良時代と平安時代初期までであります。

その国家試験はどんな試験をやっていたのか。具体的に試験の問題集が残っていないし受験参考書も当然ありませんのでわかりませんが、いろいろなことから考えていきますと、これはお経を解釈する、覚える。それから節をつけて唱える分は節を唱える。そういうような試験をしておりました。

試験を通った人は、証明書ももらいました。そこには「誰それ、誰それ、認めます」、これを度牒（どちょう）と呼んでおりました。この度牒を持っておりますと、奈良時代は非常に便利でして、衣食住の全部を政府が保証してくれたのです。それから宗教的な理由でお寺からお寺に移動していくときの旅費も、旅先での食事も、全部政府が経営しておりました駅家（うまや）に泊めてもらえたのです。駅家でとても急ぐ場合、あるいは老人の場合はその馬にまたがらせてもらえ、晩酌も出ました。それはきっちりとした記録があります。

だからお坊さんは非常に特権階級だった。お坊さんになるためには度牒をもらわなければならない。記憶力を確かめる。最初はお坊さんのところに入ってお坊さんになって、小坊主をしていって覚えていったのですが、奈良時代はいま言いましたようにお寺が急が増えました。するとお坊さんは促成栽培で、急いで養成しなければいけないわけです。その時には受験を一生懸命、小僧で入ったような子はいないので、途中から大人からでもいけるようになったのです。これは聖武天皇が特例で 3000 人もいっぺんにお坊さんを認めたりしたのです。

その時の記録が残っておりまして、この人はどんなことができる、どんなお経を写したとか、どんなお経を口で言えるとかようなことを書いたものが正倉院に残っております。（優婆塞貢進文といいます。）当時はそういうことを覚えるために、ノウハウを持った集団ができました。それを自然智衆といいます。この人たち、例えば興福寺のお坊さんたちのグループなら、どこへ行って勉強したかということ、今の室生寺です。奈良から室生寺はだいたい 1 日で歩けます。峠を越えなければなりません。室生寺には滝もありますし、最も静

かなところで夏も涼しい。そこで籠って記憶力を高めたようです。

東大寺のお坊さんはどこへ行ったかという、最初はさすが東大寺です。そのためにお寺をつくったのです。最初は大淀町の比叡寺（ひそでら）というところへ行ったようですが、のちには吉野町に龍門寺をわざわざつくりました。そこにも龍門の滝がありまして、そこで一生懸命覚えるわけです。

法隆寺のお坊さんはどこへ行ったかという、今度は裏山に登った。法隆寺は小さいお寺ですから、裏山の松尾寺をその修行場にした。ともかく、夏は涼しく冬は寒いですけれども、涼しくて水が流れていて、滝があるようなところが一番いい。そういうところに皆籠りまして、一心不乱にお経を覚えるわけです。それを覚えて試験に通る。

東大寺のお坊さんというのは、東大寺が一番多いときは万を超す人がいたわけですから、いまお坊さんは二十数名しかいらっしゃいません。俗界を離れて龍門岳よりもっと奥地に行った方が記憶力が向上する。それで吉野川を越えて吉野山を越えて、どんどん奥へ奥へ行ったら大峰山の頂上まで来てしまった。あそこは岩がいっぱいありますよね。「この岩はおれの場所だ」といつてきたのではないかと見てきたようには私は信じているのです。

大峰山の頂上には水がない。水が1滴もありませんから、いま頂上の水は全部谷からポンプで上げているわけです。大峰山の頂上から今の道で歩いたら35分から40分で小笹というところに着く。ここは水が真夏でもとうとうと、なんで流れているのか分からないくらい水が流れています。今年も私は7月に行ってきましたけれども、ものすごく流れていました。湯水でも流れている、枯れたことがないと言っています。

するとそこで勉強していたお坊さんで、能のない人はどうしたかといいますと、「お前、もっと奥へ行け」と言われて小笹から谷の方に落とされてしまうのです。そこをノウナシ谷という谷がありまして、昔、登山の人にノウナシ谷という地名は仏教徒と関係するのですかと聞かれて一生懸命考えたら、やはり能のない人はそこへ行ったので集まったからノウナシ谷かなと言ったら、みんな大喝采をしてくれまして、今はそうと信じているのです。だいぶ眉唾に近い話です。

それからさらに南へ南へ行って弥山の頂上まで行った。そうすると役行者さんが大峰山を開いたというより、これは東大寺のお坊さんたちが開いたわけです。役行者さんというのは、本来はどこの行者さんであったかという、葛城山の行者さんでありました。多分、生きている時には吉野に行っていないと私は思っているのです。これを吉野山でも言ったら「菅谷さん言い過ぎだ」と言って怒られたのですけれども、行っていないと思います。

それでもなぜか奈良時代のおしまい、役行者さんは西暦の700年か701年に亡くなっているのですけれども、西暦の780年くらいにできた『日本霊異記』には、役行者さんは山上ヶ岳の坊さんになっているのです。たった70年。今でいうと昭和の10年代のことがもう入れ替わっているのです。

大峰山の頂上から見ると、奈良盆地はほとんど見えない。生駒山と生駒市はよく見えません。それから五條市、御所市は見えるのですけれども、奈良盆地は見えない。橿原市の教



育委員会にいる考古学者さんは、藤原宮のちょっと北の方で数メートルの間だけ、地図で見ても実際にも大峰山がちらっと見えるところがあるといっています。

葛城から大峰山は非常によく見えます。葛城や金剛からはよく見えるので、最初の伝説も葛城から大峰に橋を掛けた。役行者というのはたいへんな人だ。だからみんな尻を叩かれるから、前鬼・後鬼も逃げまくったというのが伝説です。それから日本の建国神話は、もともとは縄文以来の南北の山の道だった。それがいつのころか修験道にとって代わった。その中間に東大寺が介在しているのではないだろうかというように私は考えています。



## 紀伊半島の東西、南北の軸が交わるところが「吉野」

先ほど冒頭で日本の歴史に7回「吉野」が現れています。「神武天皇」「壬申の乱」「源平の戦い」「義経」「後醍醐天皇」「天誅組」「吉野ダラー」ですが、これは吉野が日本史の舞台に上がった時です。その1つ、「後醍醐天皇」は、なぜ吉野へ来たのかということですが、これはわりと簡単なお話であります。

南北朝の時に京都方と吉野方、これは北朝と南朝と言いますが、相争うわけです。南朝が正当な王朝ということになっています。京都にいらっしゃった天皇は正当ではない。なぜなのでしょう。これは、後醍醐天皇は三種の神器のうち、一種類の神器は伊勢神宮にあるわけですから二種の神器を持っていたのです。三種の神器を持っていた人が天皇なのです。その時、後醍醐天皇側は、京都を抑えていなかったため権力がありませんでした。五條市の賀名生の小さいところに皇居を構えていたと言っても、日本中を支配していないことははっきりしています。その時に北畠親房という人がおまして、彼が『神皇正統記』という本を書き、三種の神器こそ全てですということを書いたのです。

そしてとうとう南朝の最後の天皇は、北朝に三種の神器を渡した。渡したときには、もう実際、支配地ゼロですからだめになったのです。では吉野に隠れていた三種の神器は、実際はどこにあるのかと言いますと、鏡は伊勢神宮にあります。八咫瓊勾玉は、今も皇居にあり、草薙剣は熱田神宮にあります。しかし『日本書紀』を読んでいきますと、神武天皇が奈良へ来るまで三種の神器の話は全然書いていません。来られてからには三種に神器のことは書いております。ただし二種しか書いてありません。「三種の神器」という単語はありません。三種の神器というのはもうちょっと後の雄略天皇の時にできているのです。

鏡は作ったときの失敗作というのがありました。これは今日の最後のお話なのですが、失敗したのと、平安時代の記録書に載っています。2回目に作ったのはちゃんとでき、これが三種の神器となりました。では、1個目はどうしたかと言いますと和歌山市の日前國懸神社、一般には和歌山では日前宮とか國懸宮とかいって、JR和歌山駅の東に2kmほどのところにあるお宮さんにあり、そこのご神体であります。

出来上がったのは伊勢神宮のご神体。伊勢神宮と和歌山は、紀伊半島の東西に、エラのように飛び出したかっこうです。

紀の川を東に遡ると吉野川になります。今度は吉野川の東には、東吉野村の高見山、高見峠がある。さらに東には櫛田川が流れて、もっと東に伊勢神宮が位置しています。

だから紀伊半島の右と左、西と東に、古代人たちはポイントがあると考えていたわけです。これが紀伊半島の東西線。南北線はいま申しましたように、本宮からずっと修験の道である道であります。だからちょうど十字固めのような宗教の伝説があって、それが『日本書紀』やその他に反映している。いま言った和歌山にあるというというのは『古語拾遺』という本です。こちらの伝説のほうが古いというのが一般的です。『日本書紀』は、国家が作り変えてできた伝説。『古語拾遺』というのは忌部氏という、卜部氏なのですが、忌部

氏が自分のところで伝えられる伝説を書いたものでありますので、より古い形態です。

ともかく、日本国家の起源神話は紀伊半島を南北に貫く線と東西に貫く線。それが交わるところがどうも奈良県の川上村か吉野町のそのややこしい、吉野か川上かといっているあたり、宮滝あたりになるわけであります。まさに神武天皇、壬申の乱の発祥の地ぐらいが南北と東西。その南北を後にうまく宗教として活用したのが、私がやっております修験道でありまして、行者さんであります。

雑漠とした話で、縄文の話をしたり、吉野ダラー、昭和 30 年代の話をしたりいろいろなことを申しましたが、日本の建国神話は、決してこの大和盆地ではなく、紀伊半島の南部を中心にしてできあがっております。みなさんもぜひ、川上村へ行かれたらいいと思います。そこで温泉にも入っていただければいいと思います。

本日は、どうもご清聴ありがとうございました。

【司会】

先生ありがとうございました。紀伊半島の縦軸と横軸の物語があって、それが交わるころの、吉野、川上というところは時代のキーとなるポイントであったということでした。そのいろいろな物語を、現代の我々がどんなふうにかかしていくかということ、後半のテーマとして進めてまいりたいと思います。もう一度、菅谷先生に大きな拍手をお願いいたします。



## 事例報告と紹介 「源流には、宝がいっぱい！」

---

### 川上村での環境学習の体験から（体験校報告）

神戸夙川学院大学 河本 大地 先生

1978年岡山県建部町生まれ。広島大学で地理学等を学び博士号を取得。2007年に開学した神戸夙川（しゅくがわ）学院大学で、観光文化学部の講師として地理学や地域づくり、エコツーリズム/グリーンツーリズムに関わる分野を教えている。博士論文のテーマは「有機農業の展開と有機農産物産地の形成に関する地理学的研究 日本およびスリランカを事例として」であった。これからの時代の「地域多様性」および地理学のあり方、農山村地域振興、ESD（持続発展教育）等に強い関心をもつ。

以上ご本人ホームページ（<http://daichi.tk/>）より引用。

#### 【司会】

前半の菅谷先生のご講演でも、この川上村の持つ資源、価値というものが、とても魅力あるものだということをご紹介いただけたのではないかと思います。そして、すでにこのような地域の魅力を評価いただき、これを学校の教育に生かしていただいております。

このシンポジウムでは毎年、実際に川上村に来ていただいて、体験をいただいた学校の先生にお越しいただき、その成果や課題について発表をいただいております。

本日、発表いただきますのは、神戸夙川学院大学の河本大地先生です。毎年、学生たちを引率して川上村での体験教育を実施していただいておりますので、それらを振り返っていただき、カリキュラムの展開やご苦労話、課題や成果、学生たちの感想なども含めてお聞きしたいと思います。それでは河本先生、よろしくお願ひします。

【河本先生】

「こういうところにこそ宝がたくさんあるのだ。」ということ  
を伝えたい気持ちをずっと持っていました。

こんにちは。神戸夙川学院  
大学の河本大地と申します。  
よろしくお願いいいたします。  
まず、神戸夙川学院大学とい  
う大学をご存知ない方が大半  
ではないかなと思いますので、  
そこからちょっと紹介をさせ  
てください。

これは「google earth (グー  
グル・アース)」というもで、  
地球上のどこでも、航空写真を見ることが出来ます。それで見  
た私の実家のあるところ  
です。今は政令市となった岡山市の北区の一番北の端になってい  
ますが、建部町と  
いうところで私は生まれ育ちました。

(写真を指して-) 実家がこのへんにありまして、小学校がここ  
にありまして、ここに旭川というの  
がずっと流れております。岡山  
県の蒜山高原から岡山市の瀬戸  
内海のほうへ流れている川です。  
このあたりは吉備高原と呼ばれ  
ていますが、この上側のほう、  
急斜面をずっと上がっていくと、  
上側のあたりも結構、開けてい  
るのです。ただ、今よく限界集  
落なんていうことを言われます  
が、その定義でいいますと、こ  
の上側の集落は、すべて限界集  
落と呼ばれるところになって  
しまっています。残念ながら川上  
村の場合も、そういうところ  
が多くなってしまっているわけ  
ですが、こういう地域で生まれ  
育った者として、「こういうと  
ころにこそ宝がたくさんあるの  
だ。」  
「これからの世界に生きるもの  
がたくさんあるのだ。」という  
ことを伝えたい気持ちをずっと  
私は持っております。

私の大学は神戸のポートアイ  
ランドの西海岸にあります。夙  
川という名前をご存知の方が、  
もしかしたらおられるかもしれ  
ません。元々、西宮なのですが、  
中学校、高校、短大と幼稚園  
が、今も西宮に夙川学院とい  
うかたちであります。そこが4  
年制大学を4年前に神戸のポ  
ートアイランドに設けました。  
周りには、兵庫医療大学、神  
戸学院大学、神戸女子大学も  
ありまして、四つの大学で一  
つのキャンパスというような  
格好になっている、海辺の新  
しい大学です。今度の春によ  
うやく卒業生を出すと  
いう若い大学です。西側には  
毎日、夕日が非常にきれい  
に見えまして、神戸港を行き  
交う



船が通っているところです。

私は岡山県出身で、大学も広島でしたので、関西というところに全然縁がなかったのです。新しく神戸に来て、元々、専門の地理学とか、あるいは自然環境、生活文化といったものを生かした観光を教えていくにあたって、やはり、いろいろな方との接点を持っておきたいと思っていました。そこで2007年1月に兵庫県の三田市で「千刈ミーティング」と呼ばれる、当時、環境教育にかかわっている人たちの関西での集まりがあり、参加しました。そこで森と水の源流館の木村さんと出会いまして、意気投合して、ぜひ川上村でいろいろなことをさせていただこうということを決心しました。

## 驚きに満ちた、まさに異文化体験！？

私たちが、どんなことを川上村でやっているかと言いますと、この毎学期、学生たちに自然環境保全論という授業の第1講目で配っている資料を見てください。「奈良県川上村エコツアー」と題し、これは今年の6月実施の分です。近鉄大和上市駅10時半集合。この時点で学生たちは「どこ？」と言うわけなのですけれども、その後、そこから川上村のバスで目的地に向かいます。遅れた場合、自力で川上村の湯盛温泉杉の湯までバスに乗り（57分）そこから朝日館まで歩いてください。（徒歩で約2時間半）こう書くと、絶対に遅れてきません。そして解散は翌日の17時としてあります。

ツアーの目的は、原生林、人工林、山村地域について、五感を使って理解を深める、これを第一に入れております。日本の国土の67%ぐらいが森林だというふうに言われていますが、その大半は人の手が加わっている森林になっています。しかし、それでも森林の2~3%ぐらいは原生林です。私は神戸に来たときに、どこにそういうものを勉強できる場所があるかなと、だいぶ探したのですが、なかなかちょっと適切な場所がありませんでした。人工林に関しても同じです。兵庫県の人工林というと、ほとんど100%が第二次世界大戦後の拡大造林です。ほとんど荒れ果てていますが、それはそれで見せる価値はあります。しかしそうではない本格的な人工林というものも見たいという気持ちがありました。それと併せて山村地域も、ほとんど触れたことのない学生たちが多いです。いわゆる里山に関しては、学生たちの原風景としては、実際の里山よりは映画の『となりのトトロ』というのがあります。そこから始めて、兵庫県内で勉強させる格好にしていますが、特に1、2年生向けの科目では、原生林、人工林に関して、川上村でお世話になるという格好にしています。

二つ目の目的としては、エコツーリズムやインタープリテーションについての理解です。何か横文字ばかりですが、観光文化学部ですので、ツーリズムの勉強、それからインタープリテーションというのは、自然環境とか、そこでの生活文化とかについ

て案内をしたり、また案内人ということについて理解を深めています。

1日目は主に水源地の森という原生林の保全地区を訪ねます。年2回、6月と12月に行っています。それぞれの時期で全然風景が違う風景を楽しんでいます。森について話すと、それだけで長くなるので次にいきます。

宿泊はいつも柏木の朝日館に泊まらせていただいています。非常に趣がある建物です。確か明治時代創業のということです。建物の中に入って一番びっくりするのは、吉野建てという建て方です。2階に上がると、そこに庭が広がっている。私も初めて行ったときは、相当びっくりしました。学生たちもびっくりします。それから、いつも驚かされるのが、ゆずようかんです。おかみさんの手作りで、いつも準備してくださっています。どの学生も「これはおいしい」といつも言っています。それから花を生けてくださっていたり、非常にきれいなところですよ。窓のガラスも昔の製法で作られているために、少し波を打ったような格好になっています。割ってしまうともう二度と作ることができないガラスが使われています。それを話すと、学生たちはびっくりします。そもそも旅館というものに泊まったことがない学生が9割以上占めていますので、驚きに満ちた、まさに異文化体験のような格好になっています。

ここは修験者を多く泊めてきたところでもありまして、私はまだまだ勉強不足で、よくわからない部分がありますが、歴史的にも価値のあるものがたくさん保存されています。それから、なかなか今は目にする機会もない、非常に高級感あふれる調度品が使われています。

いつもいただく食事は、地のものが非常に生かされています。まず割りばしは、吉野杉です。これが貴重なものであることを、いつもおかみさんを始め、皆さんが説明して下さります。吉野杉は年輪が非常に細かく入っているというようなところです。このへんは、見ただけではわからないものです。それからアユとか、イタドリとか、いろいろなものが入っています。それも季節によって中身が変わります。冬になるとイノシシの肉などをいつも入れてくださっています。

## 薪でお風呂を焚くこともできるのだということが、 学生たちには非常に新鮮です。

毎回、大事にしていることのひとつが、おかみさんに昔からのいろいろなお話を聞くということです。学生たちへの案内文には、ひそかに「山村地域と老舗旅館の栄枯盛衰」という題で講話をいただくと書いていますが、ざっくばらんに、いつもお話をいただいております。いつもありがとうございます。

学生たちにとっては、そもそも大峰山というのが何なのか、どこにあるのかもわかりません。修験者が何なのかもわかりません。そういう状況でお話を聞いていますの



で、なかなか難しい面もありますが、それでもいろいろと想像を巡らせながら聞いています。ここの旅館の建物は、部屋ごとにそれぞれ造りが違います。またお公家さんに近い方ですか、そういうような方も泊まれたことのあるところも案内していただいています。

これも学生たちにとっては非常におもしろいことなのですけれども、お風呂を薪で焚いています。都市ガスやプロパンガスが、あまりにも当たり前になっているわけなのですが、薪でお風呂を焚くこともできるのだということが、学生たちには非常に新鮮です。時々、おかみさんのお手を煩わせて、学生たちが一緒に薪割りをさせていただきます。かまども使っておられて、薪を使われています。いつもエコツアーの終わり頃に「おかいさん」を炊いていただいています。先ほどのゆずようかんも、ここで作られています。どういうふうに作られるのか、質問をします。いつも最後には、記念写真を撮ります。

## よくよく観察すると、いろいろな知恵や技が そこに潜んでいるということが見えてきます。

柏木の中を歩かせていただいています。柏木地区は歩いて非常におもしろい、風情があるところだと、私は最初に来たときから思っていました。今あちらこちらで歴史的町並みを重要伝統的建造物群などに指定して保全、保存する動きが広がっています。奈良では今井町ですとか、いろいろなところでされていますけれども、それをやってもおかしくないぐらいの町並みがあるのではないかなと、私は思っています。

町場の部分と山村集落の部分の両方を持っているというのも、この柏木のおもしろさではないかなと思います。清水が湧いているところで、そのいわれなどの話を辻谷達雄さん、通称達っちゃんに案内していただいています

サーッと歩いているだけでは見過ごしてしまうのですが、石垣の積み方とか、建物の建ち方、斜面の生かし方といったところも、よくよく観察すると、いろいろな知恵や技がそこに潜んでいるということが見えてきます。

いつも学生たちがおもしろがるのは、なぜか窓にハート型のマークがたくさん付いています。決してラブホテルではないと、私は思うのですけれども（笑）。

昔のお米屋さん、おしょうゆ屋さんなども、いつも紹介していただいています。なかなか今の景色から昔の栄えているという言葉がいいのかどうかわかりませんが、人が多く柏木に出入りしてきた様子というのを想像するのは難しい面がありますが、それでも、その面影をたくさん残していて、地元の方々からいろいろなお話を伺うにつれて、ここの山里の暮らし、あるいは、ここを行き交う人々の様子というのが、だんだんと目に浮かんでくる地域です。

都会のようなという話がありましたが、そんな雰囲気のパスターミナルの跡です。大台ヶ原ですとか、いろいろなところにバスがここから行き交っていた跡が今も残っています。私は勉強不足でよくわからないのですが、洋館のような建物も残っていて、もっと柏木のことを知っていったら非常におもしろいと思います。たぶん放っておくと、このような歴史的な建築物も消えていってしまうのではないかなという恐ろしさも感じながら、いつも拝見しています。木造3階建ての建物が残っているというのも非常に貴重です。幼稚園の跡にも立ち寄らせていただいています。対岸の神之谷のほうに渡るつり橋で、達っちゃんとか、いろいろな方々に説明をいただきます。

後南朝の歴史の話なども聞きながら、いかにここがすごいところなのかということも学ばせていただいています。大峰山への登山口や、芝居小屋、映画館があったという話なども、学生たちはいつも驚きながら聞いています。

このようにこの地域の歴史、それから変化といったものを知っていくことで、地域を見る目というのが少しずつ養われていく感じがします。

おかいさんを頂きながら、地元の方にかわいらしいブローチやペンダントなどを作ってくださいます。学生たちは、非常に喜びます。薪割りの勉強もさせていただきます。(動画で紹介)

この薪割りの上手な学生は、実はネパール出身の子で、今も電気がない村でずっと生まれ育ってきています。吉野杉というのはパカパカ割れて気持ちがいいと言っていました。一方ほかの子は、全然当たっていません。なかなか、まき割りの先生方も困っていらっしゃるのですけれども、こういったかたちで山村の暮らしに少し触れさせていただいています。

その後、粉尾という場所へ行き、吉野杉、吉野林業というのはどれだけすごいものなのか、どんな森林がこれによって本来作り出されるものなのかというものを、見せていただいております。毎回毎回、内容を変えています。林業体験をさせていただくこともあります。

自分たちの地域に光を見られるようでないと、長続きしない。  
同時に、そこを訪ねてくる人たちが、ここを訪ねることで  
光を見られるという格好になったらいいなと考えています。

私たちは観光文化学部というところですが、観光はそもそも、どういう意味なのかをちょっと考えてみたいと思います。観光はイメージとして、大型バスでやってきて、山の中なのにエビやカニを食べて、ドンチャン騒ぎをして、物見遊山して帰っていくようなイメージが結構こびりついてしまっているわけですが、そもそもは光を観ると書きます。川上村のような山村地域、山里の地域における観光というのは、私は自分

自身がそういうところで育ったからというのもあるのですが、一番には、その地域の方々が、何か自分たちの地域に光を見られるような観光でないと、長続きはしないだろうと思っています。同時に、そこを訪ねてくる人たち、うちの学生たちも、いつもいろいろお世話になっているのですが、ここを訪ねることで何か光を見られるという格好になったらいいなと考えています。

例えば神戸や大阪で生まれ育った学生たちが、私の大学には多いですが、山村に触れたことのない学生たちが、日本にもこんなところがあるというのがわかった。あるいは石油を使わない生活、あるいは地のものを生かした生活というのがあり得るのだ。そういう姿を五感で体験してみることに光を見出すということがあると思いますし、一方で先ほどのネパールの子のように、川上村の数十年前のような世界で生まれ育った子が、自分が生まれ育ったところというのは本当にへき地で何もなくて、どうしようもないというふうに思っていたのが、実はすばらしいところなのだということに気づく。それも一つの観光なのではないかというふうに考えています。

いま地域の豊かさというのを継いでいこうと、あちらこちらで言われていますが、こうしたかたちのツーリズム、観光というのは、そのための重要な道具になっていくと考えられます。柏木はというよりは、川上村はあちらこちらで限界集落というカテゴリに入ってしまふようなところも多いわけで、行政の立場からすると、そうしたものは、よくサポートの対象として考えられてしまふますが、実はよそ者にとっては、こういう地域こそ地域学習、環境学習における比較の基盤づくりとして大きな意味があるというふうに私は考えています。

たった1泊2日で、この科目は1、2年生向けの本当に入門的な科目として位置づけてはいますが、いつも比較の基盤、山村というと川上村を思い出すとか、それから自然環境を使いながらの生活というので川上村を思い出すとか、そういう比較の基盤になるような経験をさせていただいていまして、いつも川上村の皆さんにはお世話になりっぱなしです。このマツボックリで作った置物も柏木の方が作ってくださって、これを写真立てとして、いつも私の研究室には飾っております。

ありがとうございました。



## 座談会（リレートーク）「語り部が伝える山村の魅力」

神戸夙川学院大学 河本 大地 先生

森と水の源流館 館長 辻谷 達雄

森と水の源流館 木村 全那

川上村 柏木地区のみなさん

### 【司会】

今、神戸夙川学院大学の河本先生より、川上村で行なわれた体験教育について発表いただきました。毎年このシンポジウムでは、訪ねていただきました先生方に、川上村のことについての、ただ今のような感想とか評価をいただくようなかたちで終わっていたのですが、今年はさらに一步踏み込んで、「では、受け入れる地域の側にとって、そういうことは一体どうなのか」ということについて、少し意見を交わしていただく時間をこれから取りたいと思います。

時間も十分ではありませんので、ディスカッションというよりはリレートークというような表現が正しいかと思えます。都市の若者の体験学習の場として、地域がどのように生かされているのか、地域がどのように変わることができるのかということで進めてまいりたいと思います。進行のほうを森と水の源流館、木村に渡します。

### 【木村】



先ほど河本先生から報告について少し掘り下げて、お話をしていこうかと思っています。壇上には、引き続き河本先生と、森と水の源流館館長の辻谷達雄と私の3名で進めます。

河本先生からは、川上村南部の柏木という集落を事例として、報告いただきましたが、実は河本先生とは、この集落に行く前にも、川上村内のいろいろな集落を回っております。その中で河本先生ご自身が、一番ここがいいということで、かれこれ4年間続いているわけです。この柏木という集落の何が先生を引き付けるのかなども、お話ができたらと思っております。ただし時間が非常に限られておりますので、ざっくりな話に終始する可能性もありますし、あえてこの場で何かをまとめるというふうなつもりもありません。今日はサポートをいただいている柏木の集落の皆さんにも、会場に来ていただいておりますので、生の意見もできるだけお聞きしたいと思っています。よろしくをお願いします。

では、まず河本先生にお伺いします。先ほどご紹介いただいた活動の結果、学生さんの変化や感想について教えてください。

【河本】



学生の感想は、基本的に事前学習をどのくらいするかによって変わってきます。これまで7回ここで、エコツアーをさせていただきましたが、「エコツーリズムとは何か」あるいは「山村地域とは、どういうところで、これまでどんなことをやってきて、どんな悩みをいま抱えているのか」それを授業の最初にしないと、なかなか意味が

わかってもらえないことを、いつも痛感しております。

実は、いつも川上村に来させていただくときに、ルールを一つだけ設けてあります。この1泊2日の中で、川上村の中には一切ゴミを捨てずに帰る。これだけ守らせるようにしています。エコツーリズムとは何か、こういう地域はどういう意味ですごいかを知らせずに行ってしまうと、ちょうど2年目にもありましたが、旅館に、ガラス棒で装飾された珍しい手洗い場がありましたが、そこに買ってきたカップラーメンの食べ残しを捨て流していました。

その場に来てから学ばせていただくだけでは、少し足りないこともあるかなと思います。いきなり来ても、学生たちは都会の発想、都会のライフスタイルをここにも持ち込もうとします。ゲーム機を持って来る子などもいます。ただし、ここの地域がどういう意味を持っているのか、そこではどんな暮らし方をされているのかについて話をし、その凄さを見せておくこと、たとえば吉野林業はどういうものなのかを少しだけでも教えておくこと、まったく学生たちの態度は変わります。それ次第で後の感想も変わってきます。

一つ学生の感想を紹介します。毎回必ずブログにエコツアーの成果を報告するという課題を出しています。帰りの近鉄の電車の中で、君は何が書きたいというのを聞いて、内容が重ならないようにしています。直近の今年6月の分で、ある女子学生が、食事ということで書きました。「奈良県の川上村に行ってきた。緑に囲まれた美しいところだった。隣には有名な吉野山があった。そこでは四季の移ろいを感じ、鳥のさえずり、風の音、川のせせらぎさえも感じとれる自然があふれたところだ。そんな川上村の食事について紹介したい」続けます。「私たちは川上村の朝日館という小さな旅館に1泊2日させてもらった。おかみさんも、これまたきれいなおかみさん。私たちは

夕食と翌日の朝食をごちそうになった」そして、「たまご豆腐、煮物、酢の物、アユの甘酢漬け、アユの塩焼き、造り、山菜物がメインで、肉や揚げ物などは一切なかった。いわゆる精進料理だ」。本当に精進料理と言うかどうかは怪しいですけども、「川上村ではアユもよく釣れるということで、アユ料理も食卓に出ていた。アユの塩焼きには正しい食べ方もあるみたいだ」

朝ごはんについても、「白飯、みそ汁、たまご焼き、焼き魚、山菜のおひたし、漬物、味付けのり。朝食も山菜物がメインだった。私が一番おいしかったと思ったのがたまご焼き。味も薄味で食べやすく、だし巻きの巻き方が、またちょうどいい具合に空気が入っていた。とてもふんわりしていた。ここ奈良県川上村では柿の葉寿司も有名だ・・・」と、いろいろ書いていまして、ほかには、植物のにおいとか、木いちごの話も書いています。そして「そんな大自然の中での一番のごちそうは一体何なのだろうか。私はやっぱり水ではないかと思う。川の天然水だ。私は川辺で休憩しているときに、川の水を飲んでみた。川の水を飲むなんて初めての体験で少し怖かったが、川があまりにもきれいだったので、これは飲んでおかなきゃと思って飲んでみた。それは本当においしかった。こんなおいしい天然水を飲んだことはあつたらうか。感動した」さらに、「そんな地元の方は、こんなきれいな水を使って、茶がゆというおかゆを作ったりしていた。米がなかなかとれない川上村では、田んぼが確か1枚もないのです。米は本当に貴重な食材なのだ。そんな米で作る茶がゆは、何とも言えないおいしさだった。名前のとおり、米をお茶でおかゆにするのだ。シンプルな味で、実はお



かゆが苦手な私でも、茶がゆはおいしくいただけた。こんなにおいしくいただけたのは、おそらく地元の人の愛情がたくさん入っていたからだよね」と書いています。

地元の方々は茶がゆを出されるときに、非常に謙遜されるのですけれども、私は白いご飯の300円増しで売っても、十分茶がゆのほうが売れるのではないかと思います。かつての意味合いとは変わってきていると思います。それが価値観です。

「川上村の朝日館のおかみさんを始め、皆様方、地元の方々、おいしいお食事をごちそういただきまして、本当にありがとうございました」とまとめています。ちなみにこの子は、このときに川上村が大好きになりまして、川上村ではインターンシップという制度で夏に2週間、学生を受け入れてくれて、職場体験、地域づくりを実感するための活動をしておられ、ぜひそれに行きたいと、この夏に参加しておりました。

#### 【木村】

ありがとうございます。辻谷館長は、源流館ができる前から山村の暮らしを町の人に伝えていきたいということで、「達っちゃんクラブ」ということをずっとやって来られて、いわゆるエコツアーの走りになるかと思うのですけれども、長年にわたりまちの人を受け入れてこられての苦労話とか、逆に楽しい点なんかも併せてお話をしていただけたらと思います。

#### 【辻谷】



私が「達っちゃんクラブ」を開こうとしたきっかけは、今から20年ほど前になるのですが、当時、大阪の南河内の河南町に持尾というところがあるのですけれども、そこに「里山倶楽部」というのがありました。そこでは炭焼きとか林業とか田んぼづくりとか、そんなことを教えていました。そこから林業体験や自然体験の講師の依頼がきまして、10年ほど日曜日にはそこへ出かけていたのです。当然、参加者は大阪のまちの人がほとんどなのです。

その人たちとの交流の中で気づいたのですが、当時まちの人たちは、特に団塊の世代といわれる人たちは、お金や物を求める時代は終わって、心の豊かさとか、癒しを求めて自然の中に行きたいという願望が皆ありました。ところが、どこへ行ったら、案内をしてくれるのかというのがわからない。それさえわかれば、いつでも出かけて行きたいというのが皆さんの声だったのです。

もう前からですが、全国どこの農山村でも共通の悩みを抱えております。過疎、高

齡、少子化という問題。川上村もちろん、その例外ではありません。これからはやはり、都市住民との交流を進め、1人でも多くの町の人たちが川上村に来てくれるよう、できたら私が町の人と川上村の自然とを結ぶパイプ役になろうと思ったのです。それで「達っちゃんクラブ」を始めたのです。

それからもう13年ほどやらせてもらっているのですが、今頃そんなことを言いますと、みんなに笑われますが、川上の中を案内して、気づいたことがたくさんあったのです。川上村というのは外から見ますと、吉野杉のきれいな山と、それからきれいなおいしい水の流れる吉野川に代表されるのですが、それももちろん大事ですが、ずっと歩いてみますと、歴史的にも文化的にも、すばらしい観光資源がたくさんあるのです。いわゆる宝の山だと思っています。これからももっともっと川上村のそういう魅力をPRしていきたいと思います。

【木村】

少し聞いてもいいでしょうか。私ももともと、まちの人間なのですが、たぶん山村の中に若い人、まちの人が入ってくるのは、いわば宇宙人と接するみたいなものかもしれないですね。私もだんだんと、教えている子どもとの年齢差が開いてくると、宇宙人かなと思ってくるようなことがあります。館長は若い人たちや、まちの人たちと接する上で、苦労されることはありますか。

【辻谷】

特に若い人たちに伝えたいことは山ほどあるのですけれども、時間がありませんので一言だけ言わせてもらいますと、まず大学の学生さんなどに対しても、「生きる力を養う」ということを伝えたいです。言葉では簡単ですが、非常にこれは難しい問題です。私流にこれを言いますと、人間は生きていく上で、いつ、どんなことに遭遇するかわかりません。それを克服するだけの知識と知恵と技を身に付けていただきたいという話を若者にするのです。

「知恵と知識とはよく似てますが、違うんやで」という話をするのです。どこが違うかという、今の子どもさんから大人全般に渡って、パソコン等々で知識というのは頭からあふれ出るほど、みんな持っていると思います。ところが、その知識を応用する知恵と技に欠けていると思うのです。1例を挙げますと、ちょっと古い話ですが、私は奈良県の山岳救助隊員をしていたことがありまして、大台ヶ原で大阪の高校生が2人遭難したのです。救助の命令がありまして行ったのですが、もうすでに2人とも亡くなっていました。そのときに横に大きなリュックが置いてあったのです。その中を見ますと、何日も食べられるぐらいの米とかジャガイモがたくさん入っていたのです。ところが、携帯燃料だけは全部燃やしていたのです。彼らは携帯燃料さえ持っていれば、どこでも火をおこしてご飯を食べられるという知識だけで大台ヶ原へ入った



のです。それで結局亡くなったのですけれども、我々でしたら携帯燃料を使い切ることがないように、木に火をおこすという知恵と技術が働くと思うのです。ただ知識だけで山へ入って亡くなっているのです。そういうことで、私は「知恵と知識は違うんやで」という話をするのです。

いろいろな長年の自然体験の中で、私も身に付けてきたのです。私たちが提唱しております『源流学』というのがあります。それがまさしく生きる力を養う根幹であると思っています。ところがその『源流学』を継承していくための人材が不足しているということが一番の課題だとしてきましたが、2年ほど前から、私の地元の柏木を中心に5人ほどの方が、「達っちゃんクラブ」とか源流館の活動を応援してくれています。今日も会場にお越しですが、まちから来る人へのおもてなしも、だんだんと浸透してきていますので、非常に心強く、また感謝をしているところなのです。

【木村】

先ほど河本先生から観光という言葉がでました。観光というのは、今まではシステム化されたところに観光に行く。だから、もてなすほうも、わりと慣れたプロのもてなし屋がいる場所が多かったわけです。ところがエコツーリズムの中では、観光についてはド素人というところに入っていく場合があります。迎える側のおもてなしということも難しいわけですが、柏木地区では結構、夙川学院大学の講座など、今のところすごく成功を収めていると言っていいと思います。

では、いつもご協力をいただいている柏木地区の地元の方々にも、お伺いしたいと思います。どんな気持ちで接していただいたのか、どんな感想を持っていらっしゃるかなどについて、いつも薪割りのいつも指導をいただいています浦本さんに感想をお願いします。

【浦本】

「達っちゃんクラブ」のサポートをしています浦本です。仕事によっては、いろいろな準備もしなければいけないのですが、こうやって山のことを応援してくれるのは、たいへんうれしいことだと思います。私たちが川上の歴史の話をするのに、少し勉強しておかなければならないという気にもなります。これも学生さんたちのおかげです。源流の村で、森や木のすばらしさを体験していただいたら、もっといいと思います。



【木村】

ありがとうございました。続いて森本さんにお願いします。

【森本】

いつも学生さんたちが川上村に来てくれたときには、ちょっとお手伝いをさせてもらっております森本です。最近、村の中でも若い者が非常に少なくなってきております。そして学生さんたちが川上村に来てくれたときには、いろいろなことも学んでほしいのですけれども、難しいことを教えてやろうとか、そういうことは全然なくて、私自身、みんなと一緒にワイワイガヤガヤと騒いで楽しんでいます。非常にうれしく思っております。



【木村】

ありがとうございます。続いてお宿をいつもお世話していただいている、朝日館というお宿があります。そこのおかみさんの辻さんです。

【辻】

神戸夙川学院の先生や生徒さんには、泊まっていた夜には、いろいろなお話をさせていただいています。私も嫁いで40年になりますが、川上や柏木の歴史は、主人のご両親や、おばあちゃんからお聞きしたお話がほとんどです。エコとか環境とかに興味を持っていたら、若い人たちがすごく感動してくださるのは、私もとてもうれしいです。



私が一番驚いたのは、初めて来てくださった日に先生が生徒たちに、「ゴミはちゃんと持って帰るように」という声かけをなさって、それでお帰りになる際に、私はびっくりして、「どうぞ置いておいてくださって結構ですよ」と申し上げたら、「いえ、川上村にゴミは残さないということなんです」と先生がおっしゃって、すばらしいことだと思いました。この頃は川上に来てくださる皆さんは、山や川にゴミをほとんど放かして帰る方が多い中で、なんてすばらしいことを教えておられ、またそれを実行されているんだなと感心いたしました。

【木村】

先生のほうからは、ここを選んでとてもよかったというふうな意見をいただいたのですが、村や森と水の源流館の立場からも村のことについて紹介をいたします。

川上村は今年、環境基本条例というものを制定しまして、川上らしい環境づくりをどんどんしていこうとしています。山村というのは町から取り残された感は確かにあるのですが、そういう取り残された中に、いま伝えなければいけないような問題が結構たくさんあります。例えば、かまどです。かまどなんていうのは若者は見たことがないので、ほとんどの学生さんがここで初めて見て、初めて肌で体感します。薪もそうです。石油を燃やすのと違って二酸化炭素は出ない、難しくいえば、カーボンニュートラルということです。環境に配慮した燃料源を、昔の日本人は知恵で使っていたということがわかったりするわけです。

食事では、地産地消と言いますが、人間が山のものを使う知恵であったり、アユなど地元のもの食べる、畑のもの食べるということは、結局、運ぶのに石油を使っていない。すごく環境にもいいし、例えばイタドリなども食べなくなると、川上村中がイタドリだらけになります。これも困るので、ある程度、人間が採ってやることによって、人と自然環境のバランスがとれているということです。今度10月に名古屋でCOP10という国際会議がありますけれども、そこでもそういうふうなことも話し合われたりします。

そして一番いいのは、地元の人とのふれ合いです。薪割りの実演を見ていただきましたけれども、結局、環境問題というのを机上の空論でするのはすごく簡単なのですが、こういう苦労を通じて考えることができるということです。薪を燃やしたら二酸化炭素は出ないよという話は簡単なのですが、そのためにする労力というのはすごく大変だし、技というのもすごく大変だということも含めて、この場で体感できるのが、いい場所だなと思っています。

#### [河本]

先ほど知識と知恵は違うということを達ちゃんこと、辻谷さんはおっしゃいましたが、まさにそれで、大学の座学では、カーボンニュートラルとかいうような話から入っても、なかなか学生は理解しにくいわけです。薪割りの経験を通して、これで毎日毎日風呂を沸かし、料理を作っているということ自体が学生たちにとっては驚きなのです。当たり前前の生活を送るために、どれだけしんどい思いをしていらっしゃるか。体験では、一時的だからそれが楽しいというところもあるとは思いますが。また新鮮ということもあると思います。しかしその労力やしんどさ、特に高齢化が進む中でのしんどさはあるのではないかと思います。そういうこの地域が抱える問題面も含めて、五感でこの村を理解していくことがとても重要です。

1泊2日ですとまだまだ表層、上澄みの部分だけで終わってしまうことが多いわけですが、その上澄みでも、これからの自分たちの人生の光を見ていく上での入口とし

て、基盤として、川上村というのがこの子たちのずっと胸の内であって、また川上村を訪ねてみたい、あのおかみさんに会ってみたい、達っちゃんに会ってみたい、浦本さんや森本さんに会ってみたい、そういうのが生まれてくるといいなということを思っています。

【木村】

そろそろ時間になるので、最後にちょっと辻谷館長に発言いただこうと思います。

【辻谷】

特に先生にお願いしたいのですが、学生さんはこれから成人し、社会人になって就職されても、結婚されても、やはりずっと柏木に、これを契機に来ていただきたいというお願いをしたいと思います。

【木村】

みなさん、ありがとうございました。過疎、山村の問題については、こういうふう  
に若者が入ってきて、地域を活性化して、持続をしていく。

菅谷先生のご講演の中では、吉野地方は5回ほど歴史の中でキーとなって出てきた  
ということでしたが、できることでしたらぜひ6回目は川上村から環境教育で、こ  
ういういいものがあるよということを発信していけたらと思います。

まとまらない話になってしまいましたけれども、これでリレートークを終わりたい  
と思います。ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。柏木の語りべの皆さんも、どうもありがとうございました。

本日は企画としまして、河本先生の学校で主に交流をいただいた川上村の中でも柏木と  
いう集落を、あえて重点的に取り上げましたが、川上村には他にも、自然的に歴史的に非  
常に豊かな魅力を持った集落がたくさんあります。そして本日は少し照れながら語って  
いただきましたが、こういった地元の語りべとなる人がそれぞれの集落にいらっしゃいます。  
今日、この会場にも、そういう方が何名かお越しいただいています。その方たちにもお  
声をいただきたいところですが、時間の都合上、それはまた来年以降のお楽しみとしてと  
っておきたいと思います。

皆さん、本日は長時間にわたりお付き合いをいただき、ありがとうございました。

では最後に、財団法人吉野川紀の川源流物語副理事長、川上村副村長であります栗山忠  
昭より、皆さんに一言お礼を申し上げます。



## おわりに

---

川上村副村長

財団法人 吉野川紀の川源流物語 副理事長

栗山 忠昭



大変長い間お疲れ様でございました。今年で4回目ということですが、お見受けさせていただきますと、ずっとお越しをいただいている方も大勢いらっしゃるようでして、改めまして、最後までお付き合いをいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。

菅谷先生には、奈良県の歴史から文化から、ずいぶんご存知で、吉野、それから川上村のことも語っていただきました。ぜひ、今度は東吉野から川上のほうに歩いていただいて、川上村でお過ごしいただければありがたいと思っております。

また河本先生は、ずいぶん川上のほうにお越しをいただいているようでありまして、学生さんに五感を使って理解を深める学習ということで、非常に感銘を受けましたし、一番そのことが大事であると思っておりますので、ぜひ、これからも柏木の皆さんにも、ご協力のほどをよろしくお願いしたいと思います。

今年はずいぶん暑いですね。これから地球はどうなるのかな、それから環境はどうなっていくのか、ゲリラ豪雨といわれる集中豪雨もずいぶんあります、こういうことだと、やはり源流がしっかりしなければいけないな、水源地の村が頑張らなければいけないなと思えます。

何回も言いますように、川上村は小さいし、エネルギーを持った人がだんだん少なくなってきています。今日お越しの皆さん方は、そういう意味ではずいぶんパワフルというか、エネルギーをお持ちの方ばかりであるので、川上村に住んでいなくても、今日は興味を持ってお越しいただいているので、どうか引き続いて、この水源地の村を見守っていただきたい、しっかり応援をしていただきたいと思います。私たちもしっかり生きていきたいと思っておりますので、末永くお付き合いをいただければありがたいと思えます。

最後になりましたが、今回のシンポジウムは国土交通省近畿地方整備局のみなさん、そして奈良県教育委員会ほかご後援各機関のみなさま、そしていつも奈良21世紀フォーラムのみなさんには何かとご協力をいただきまして、無事今回、終えられることのお礼をさせていただきます、あいさつに代えさせていただきます。ありがとうございました。

## 編集後記

---

今回のシンポジウムのねらい(企画書から)

少しでも多くの人々に参加していただけるよう、交通の便利な橿原市内を会場とし、森と水の源流館の休館日である水曜日に、スタッフ一同で実施するこのシンポジウムも今年で4年目。「水源地の村からの提言」と題し、森林と山間地域の価値や新たな役割を考えると、地域づくりのヒントを見出していこうとしたものです。

歌人の故・前登志夫先生から始まり、森林ジャーナリストの田中淳夫先生、昨年は東京農業大学の上原先生をお招きし、「森林療法」をテーマにとりあげましたが、毎年本当に多岐にわたる話題提供や問題提起をいただいております。

もう一つの背景として、平成18年度から奈良県では森林環境税が導入され、その税収の一部が森林環境教育の促進に利用されています。森と水の源流館でも学校教育機関からのご利用が増加し、「川上村らしい森林環境教育とは何か」当館でも試行錯誤を繰り返しています。現場の先生におかれても「まちなかの学校で“森林”といわれても・・・」など、ご苦労のお話を聞きました。そこで小学校の先生をはじめとした森林環境教育にかかわる教育関係者をはじめ、林政関係者や林業従事者、地域観光事業者などがとともに山や森、そしてそれがあがる地域問題を共有できる機会を設けたいと考えたのが発端です。

地域らしさの発信をめざして

今回は、平城遷都1300年記念の年でもあり、歴史的観点から山村地域の価値を考えてみることをテーマとしました。

菅谷先生からは、さまざまな登場人物を通して頭の中に物語が広がるような、実に立体的に、興味深い話題をご提供いただき、山深い吉野・川上のポテンシャルにあらためて気づかせていただきました。

これを受け、後半では山村が持つ資源、価値、その魅力を評価し、学校教育でいかしている事例と、何より地元地域のみなさんのお声をいただけたことが、非常に意義深いことであつたと感じております。

お話をいただけたみなさまのおかげで、基調講演と後半の意見交換のテーマがうまく一つの線上に乗るような展開としていただき、企画者のおもいを果たしていただくことができました。

話者の方以外にも、ご後援をいただきました団体、応援をいただきました多くのみなさまへの感謝を申し上げます。今後ともご協力をいただきながら、南部・山村地域の活性化のため、地域らしさの発信に努めてまいりたいと思います。よろしく願いいたします。

企画・運営、司会 / 森と水の源流館 財団法人 吉野川紀の川源流物語 事務局次長 尾上 忠大



〒639-3553 奈良県吉野郡川上村宮の平  
TEL 0746-52-0888 FAX 0746-52-0388  
<http://www.genryuu.or.jp>